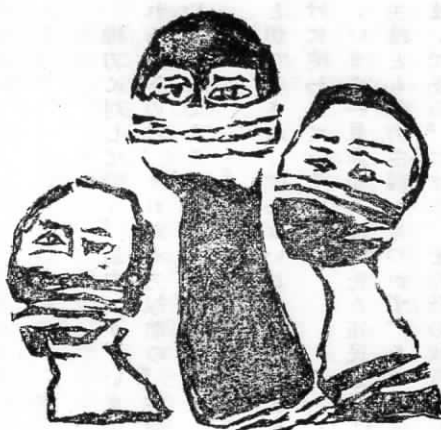


直標行動



N-10. PRINTEMPO 1976

WRI·JAPAN



W R I 日本からのよびかけ

ベトナム戦争の終結とともに、反戦の声は下火になったようです。しかし私たちの日常をとりまく支配の状況は、あまり変わったとはいえません。それどころか反戦運動が小休止しているその間も、国家は不時の侵略にそなえるという名目で、戦争準備をおしすすめ軍備の拡大をはかっています。

いま、このような反戦の退潮期に私たちが運動を守り力をたくわえていくために、A W R I の宣言と任務 V が示すものは、きわめて具体的ないくつかの示唆を与えるものと思います。

その意味で、W R I 日本は、反戦運動のあらたな方向として、また個人でもなしうる運動参加への途として、このよびかけをすることになりました。

あなたが、このよびかけに応じ、W R I 日本のメンバーまたは支持者になって下さることを切に期待します。

戦争抵抗者インターナショナル日本部

私の非暴力

木田 ふう

権力に対して闘う。暴力が、いまなお人々に受け入れられるのは、それが暴力以前の「生命力」に直結しているからである。

それにくらべ、非暴力は、その基盤である直接行動と切り離され、闘わないことのもっともらしい、いいわけに使われている。

いまの一見非暴力にみえる市民運動は、しかし非暴力主義とも暴力主義ともつかず、その態度はすこぶるあいまいである。つまり、その時の状況しだいで心情的に暴力を支持し、ふだんはなんとなく非暴力を支持している。

また管理体制がより巧妙に高度化した、いまの日本のような権力体制下では、意識的な非暴力主義者でさえ、無自覚のまま、その疑似非暴力体制にとりこまれてしまふ危険性を常にもっている。

非暴力は、非暴力直接行動の意味と内容をはっきりと

自覚し、内と外との権力にむかって対決する積極的行動とならないかぎり、それは、たゞの非暴力、無抵抗ではない。

それは、権力にとって、ふりむいて追い払うハエほどの意味さえも持たない。

一九七五年二月・W R I と関係のある核反対ヨット・フリー号が日本にやってきた。彼らは日曜日の新宿でつなひきをして、人々に語りかけた。「ホビの書」という演劇に出演してカードを配った。知りあった一人一人に、実にていねいにピラをわたした。そして広島では八月六日を中心に多くの仲間と舞台をつくり、テントを張り、イベント「ヒロシマ・ブラスワン」をやった。

これらのひとつひとつの行為の全てが、平和の種をまくことだと彼らは言った。

しかし、この『平和』な日本の状況で、彼らの行動はむしろ余裕のある人たちの遊びごととしてかたづけられかねないし、他の同じようなものと区別はつかない。

FR I号は、原水禁の大会が終ったあと、次の目的地であるソ連ナホトカへ向った。

ところがソ連では、その遊びのような行動さえ禁止される。FR Iの人たちはどうしたか。彼らは監視のすきまをぬって、ソ連の市民に出会い、町に出かけて秘密りにピラをわたした。買物にいったマーケットのあき地ですばやく展示物をひろげ、メッセージをあつめる露店を開いた。

このことの例は、権力に向けて対決する積極的行為であるとき、非暴力行動は、鮮明にその意味をあきらかに示している。

だから、できやすい状況で、できやすいことだけをやっている、いまの日本の非暴力が、権力から対決をせまられた時、果して持ちこたえうるものであるかどうか、私たちの力は、まだほとんど証明されていないというべきである。

あるいは、闘いの中で死ぬほどの覚悟さえ持たない非

暴力は、権力に対して、せいぜいひっかき傷ぐらいのものしか与えることが出来ない、迫力を欠いた行動——と言われてもしかたがないだろう。まずそのこと——日本における非暴力の状況と位置——をいまははっきり認識する必要がある。

——と、こんなふうに書いてくると、まるで私はいっぱしの活動家だ。しかし、私のほんとうの問題は、これほどに歯ぎれがよくはないということにある。正直な話、私など死ぬ覚悟などない。それどころかちよっとおどかされただけでもビリビリしてしまふ。機動隊になくられ3て、なぐり返さないのは、私が日ごろ非暴力主義をうんぬんしているからではなく、相手のあまりの狂暴さの前に手も足も出ないだけの話だ。

だから私の問題は、とても死ぬ覚悟なんか出来ない弱い、ふつうの人間にとって△非暴力直接行動▽とはなにかということなのである。

しかし、いままで私はこのことの問題を、それほど十分にはつきつめてはいなかった。

キッカケは、「東アジア反日武装戦線」による三菱、

その他の企業に対しての暴破事件だった。

このグループの一人、自殺した斎藤和さんが、私の知り合いの知り合いだった。

私に加わっている安保拒否百人委員会が、ちょうどそのころバザーを計画していたので、「東アジア反日武装戦線」救援の店をバザーに出すことを私は提案した。

これがことのはじまりだった。百人委内部では、この東アジア反日武装戦線の名を出さなくてもめにもめた。バザー開催日までにみんなの一致点をみつけることができず、結局会場に借りているお寺の方の意向もあって、問題はもちこすということで、名前は出さないで、品物だけ出すことになった。

この問題をとおして、私に判ってきたことというのは――(百人委では暴力―非暴力という形で争点が表わされてきたが)私が今までの主義としてかかっていた「非暴力」と東アジア反日武装戦線がかかっている「武闘」とが、全く違うということよりも、私にとってその最大の違いは「闘い」の意志と行動が明確なかたちで彼らにあって私にはそれがキハクであるという点なのだ。

私は、一体どのように、闘いについて積極的姿勢を持っているのか。

考えてみると、私はいままでその時々々の状況やスケジュールのままに、仲間とデモをやったり、基地にすわりこみをやったただけだ。実際のところ、それは私自らがつくりだした積極的な姿勢の上からとは言いがたい。また私は、つねつね非暴力をカカゲてきたが、その内実はことさら非暴力をカカゲてもカカゲなくても、さして他の運動と変わったものではなかった。

だから捕ってもせいぜい軽犯罪法か道路交通法違反、公務執行妨害ぐらいで、まあ半年も入ることはない、という程度の非暴力で、その限りでは安心してやれるというものだった。

しかし、バクダンとなるとそうはいかない。すくなくとも五年、十年。わるくすると死刑……。そして権力からの弾圧はもちろんだが、世間の人々も無関係な市民を殺したといっせいに非難するだろう。私だって、はじめはそう思っていたのである。

ところが、いまよく考えてみると、世の中に罪のない人間とか無関係な人間とかがいるものだろうか。私はたしかに日本に住んでいる。その日本というのは企業と結タクしてアジアを侵略し、そのギセイの上に成り立っている。私もそのおかげを受けている。アジアの人たちが

から見れば、日本人というのは殺してもあきたらないくらいに思っているかもしれない。東アジア反日武装戦線は自分達自身もふくめて、そういう日本に対して闘いをいどんでいるのである。

もちろん私は、「殺されても仕方がない」とおとなしくその死を受け入れるほど骨身にしみて罪を意識しているわけではない。やっぱり不当だと思う。しかし殺されるのはいやだという被害者としての立場だけでなく私には否応なく加害者としての立場がのしかかっている。アジアの人たちにとって、区別なく日本人は侵略国民であり、私だけ別であることを免れることはできない。

自分を被害者の立場におくだけの視点では「東アジア反日武装戦線」とは、真向うから対立する。それは彼らと敵対し、権力やマスコミと同調する他ない途である。

だが問題は、それだけですむものだろうか。自分はいったいどここの立場に立っているのか。その焦点を一面から求めるのではなく、多面的に検証して明確にするのではないと、たとえば東アジア反日武装戦線に対してどのような態度をとるのかという時、自己立場の肯定としか出てこない。私はそのことの問題をはっきりさせる必要がある—そのことのつきつめをせまられている—と感じた。

「東アジア反日武装戦線」の人たちは、その名も示すとおり武闘主義をかかっている。明らかに私と立場が違う。しかし、あのバクダンには、あの時の段階では、まだ「状況に応じて自己規制のできるもので、その発動の限度、範囲が規定されていて」むしろ「反暴力」として受けとめることのできるものではないかと思う。（しかし武闘を積極的にかかっている以上、彼らはやはり組織暴力—権力へとエスカレートする他ないだろう。——としてもなお）彼らが今やっつけようとしているのは日本国家—企業である。そして私が彼らと同じく反国家、反権力の立場に立つ以上、彼らを決して敵として市民社会から葬るようなことを黙視したり、自分とは無縁のこととすることがあってはならないと思うのだ。まして、自身自身の闘いの姿勢を問題にしないで、（殺されたくない、どんなとばっちりも受けたくないという本音は消えないにしても）非暴力主義の名をもって、彼らを非難、糾弾するやり方はやめたい—と思うのだ。

さて、積極的な闘う姿勢の（非暴力）とは何であるか—と問われたら、私はいま「それは（非暴力直接行動）」

だと思ふ」という以上の答をすることができない。

△非暴力直接行動▽は権力に対する戦闘方法、戦略、戦術であるばかりでなく、むしろ大昔から共同して、くらしてきたそのくらし方の中にある眼に見えない力を、「力として取りだすこと」その意識化からはじまる。

それは――

「――直接行動というとき、私たちは△直ちに暴力に訴える肉体的行為▽を思いうかべる。

それは△実力行使▽とも△暴力の同義語▽として一般にうけとめられている。

だが、直接行動は、本来、暴力と何ら関係はない。

△直接▽とは、△あいだに何もはさまずに接すること他のものを通さずじかなこと▽である。

すなわち私にとって直接行動とは、△他のものを通さず、自分の手と自分の力によって、ひとつの目的、自分の必要を求める行動▽である。

さらに言うならば、△私たちが日常生活において必要とするものを、間接的方法を排してもっとも直接的経路――つまり自己みずからの能力を発動して入手のために働きかけること▽である。

問題をより単純に具体化すると、△私たちが日常生活において必要とするもの▽というときの△もの▽とは、まず△食物▽に代表される△生活物資▽であり、その△生産手段としての道具▽であるだろう。△それを入手する▽とは、この場合まぎれもなく△ものをつくること▽△生産▽であり、その行動とは△労働▽にあらわされる。

つまり、直接行動の本質は、まず第一に△生産労働▽そのものである。そしてこの△生産労働▽こそは人類の歴史を通じて、人民のみが背負い、果たしてきたところの人民のみがなしうる人民の最大の「力」である。暴力以外の、暴力ではなしえない――非暴力の△偉大な力▽である。

このようにみると、直接行動とは、ものをつくること、生み出すこと、そのことのなかにもっとも明瞭にあらわれているすがたなのである。

直接行動としての生産労働は、まぎれもなく△非暴力社会▽に基盤をおいて成立している。

△生産労働▽は、私たちの日常生活の安定した持続と不可分の関係にある。

つまり、直接行動は、本来的に、 \wedge 生産と労働 \vee をおびやかすものが \wedge 暴力 \vee であることによって、すぐれて \wedge 暴力 \vee と対立すると共に、非暴力社会—人民自身の非暴力日常と分ちがたく結びついているのである。

\wedge 直接行動 \vee は \wedge 非暴力 \vee とわかちがたく結びついている—あるいは \wedge 非暴力 \vee の \wedge ちから \vee は \wedge 直接行動 \vee によってあらわれる—ということは、二重の意味— \wedge 私たちの社会生活にとって、もっとも切実な \vee — \wedge 再生産 \vee と \wedge 自治管理 \vee との関連をあきらかにするものである。

私たちがそれと思いつている \wedge 生産労働 \vee は、実は \wedge 自己の労働力を商品として資本に売る \vee ことであるにすぎない。そのようにしてえた賃金を仲介にして非直接的にしか自己の必要なものを得ることができないことにおいて、私たちの生産労働は、あきらかに、 \wedge 疑似化 \vee している。

いかえれば、直接行動が本来的に \wedge 生産労働 \vee 、 \wedge 創造活動 \vee であるということは、それは \wedge 非暴力 \vee 状況のもとにおいてのみそうであるということであり \wedge 疑似非暴力体制 \vee の下では、それに照応して \wedge 疑似

生産労働 \vee しかありえない。

それと同じように、現体制のなかでのそれは—一般に \wedge 非暴力直接行動 \vee と呼ばれる \wedge 非暴力を意識した行動 \vee もふくめて—すべて疑似わい少化されて、 \wedge 疑似直接行動 \vee か、—(権力者流の暴力行動)しかありえない、ということである。

このことは、目的意識をあきらかにするものとしてきわめて重要な意味をもっている。

このようにすべてを体制にからめとられた状況のもとで行われる私たちの闘いは、正確に言えば、 \wedge 直接行動 \vee そのものとしてでなく \vee 、まず \wedge 直接行動—すなわち非暴力直接行動—の回復、奪権の闘いである。 \vee それは、 \wedge 自己を労働疎外から取りもどし \vee \wedge 疑似生産労働を自己のためのものとするための闘いであり \vee \wedge 生産労働としての闘いではありえない。 \vee —

—向井 考「現代暴力論ノート」—

このような視点にたつ時、非暴力直接行動の意味は、一応はつきりとしてくるだろう。

それにしても—現実の社会では—人々のくらしとその

歴史は、非暴力直接行動によってのみ支えられていないが、実はそのことが全く意識されていない。そして歴史——権力者の——では、なるほど闘いの勝利を決定するのは常に「暴力」であったかもしれない。それゆえにまた、人民が一時期に勝利しても、それが暴力によるものである故に「暴力」（軍事組織）から生れた権力機構は、権力者の交替を意味する権力者の勝利になるだけで、つねに権力がなくなることはなかった。そのことはW R I 宣言でいっているように——『暴力による闘いは、ついに人民に勝利をもたらさない、ということを経史——人民の——として教えているのである。とすれば、それがどのように未確定の新しい困難な方法であるとしても、私たちが進むべきみちは「非暴力直接行動」以外にない——』——ということだ。

このことの自覚をはっきりと自分のものとする。これが「私の非暴力」の出発である。

人々が大昔から共同してくらししてきた、そのくらし方のなかにある、眼に見えない力を「力として取りだす」とその意識化からはじまると前に書いたが、それは同時に自分自身の内にある力を自覚することでもある。

それでは、私自身が自覚していない私自身の力とは一体何か。——それを具体的にひとつひとつはつきりさせることで、私は権力と闘う勇氣を持つことが出来るのではないかと今思っている。そこから私の「直接行動」がはじまるだろう。そして、私がいまやっている試行サクゴ的でケイハクな助っ人稼業も、ひとり私だけの問題でなく、他にはたらきかける意味と力をもつことになるだろう。

